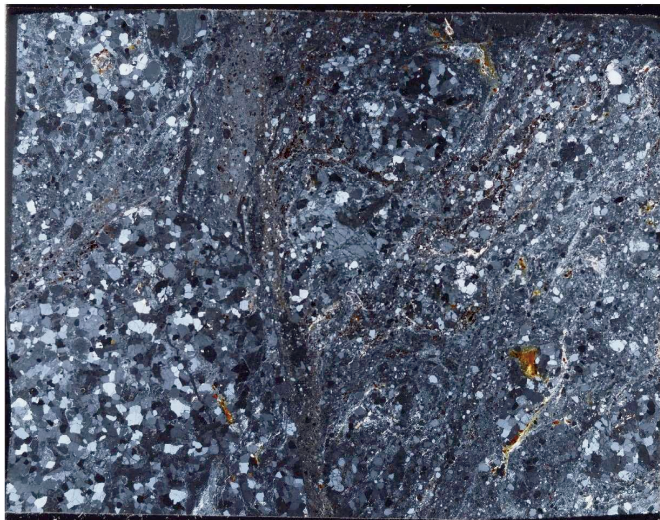


H24-D1-1 深度68.84~69.20m 破碎帯範囲 (No.最-12) の変更に伴い、最新活動面 (No.最-13) を変更

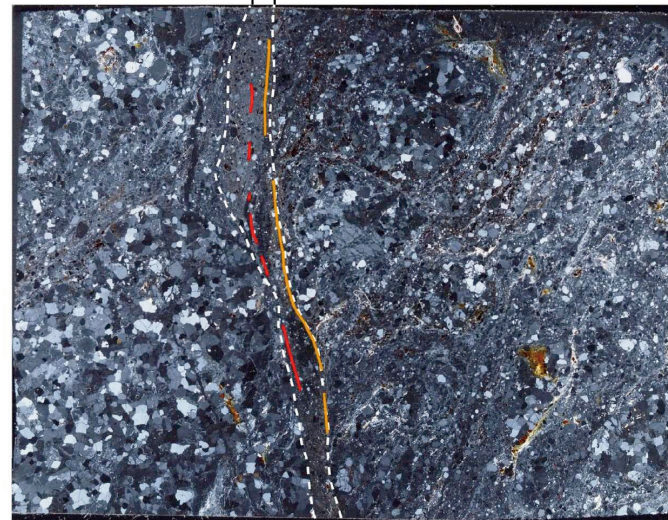
H24-D1-1 深度68.84~69.20m 薄片観察(断層面  $\alpha$ ) 最新活動面の認定

- ・深度68.93mにおける断層面  $\alpha$  沿いの最新活動ゾーンでは、他の構造に切られていないY面A、Y面Bが認められる。その分布を以下に示す。
- ・Y面Aは直線性にやや乏しく、連続性にやや乏しい。細粒部を伴う。
- ・Y面Bは直線性にやや富み、連続性もやや富む。Y面Aに比べ連続性に富む。
- ・以上のことから、Y面Bを最新活動面と認定した。



直交ニコル 全景写真

1cm



直交ニコル 全景写真

1cm

Z (NE)  
X (85° L)

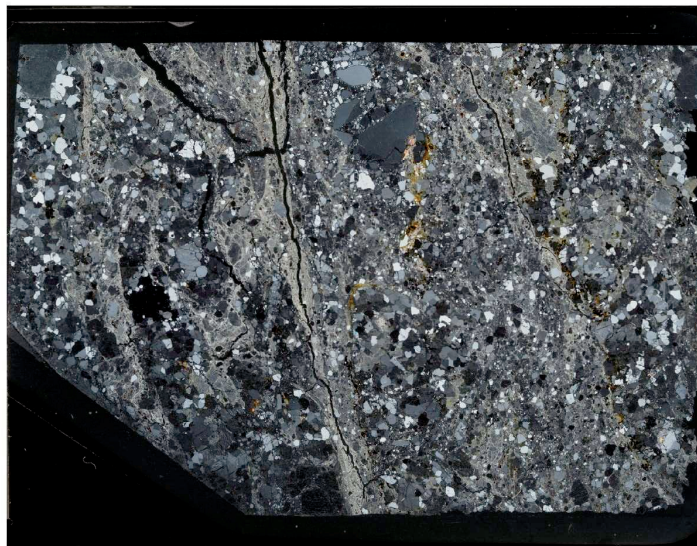
- 凡例
- Y面A
  - Y面B
  - - - 最新活動ゾーン\*
- \*薄葉上は白色又は藍色で記載

※Y面は確実に認定できる部分のみを記載しており、割れ目や不明瞭箇所では記載していない

H24-D1-1 深度68.84~69.20m 破碎帯範囲 (No.最-12) の変更に伴い, 最新活動面 (No.最-13) を変更

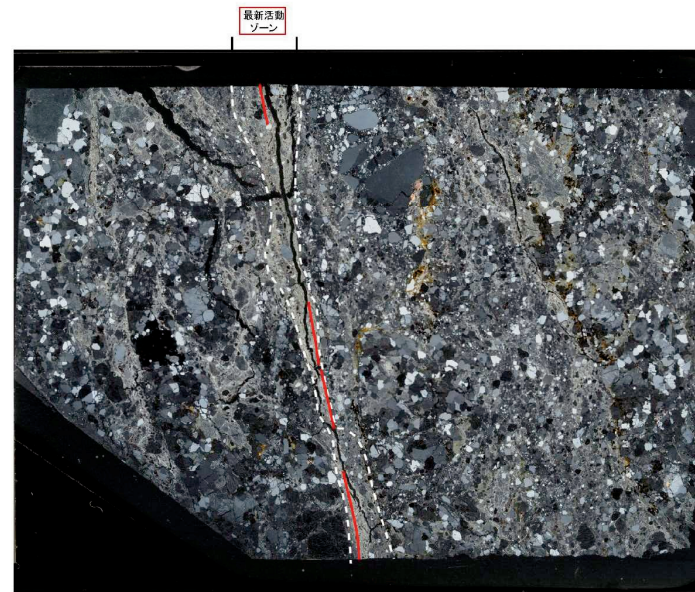
H24-D1-1 深度68.84~69.20m 薄片観察 (断層面  $\gamma$ ) 最新活動面の認定

- ・深度69.06mにおける断層面  $\gamma$  沿いの最新活動ゾーンでは, 他の構造に切られていないY面Aが認められる。その分布を以下に示す。
- ・Y面Aは直線性に富み, 連続性に富む。開口部が多い。
- ・Y面Aのみが認められることから, 深度69.06mにおける断層面  $\gamma$  沿いの最新活動ゾーンに分布するY面Aを最新活動面と認定した。
- ・薄片観察の結果, 断層面  $\alpha$  はカタクレーサイト, 断層面  $\gamma$  は断層ガウジであり, 断層面  $\gamma$  の方が細粒化がより進んでいることから最新活動面に認定した。



直交ニコル 全景写真

1cm



直交ニコル 全景写真

1cm

X(7° R)  
↑  
Z(N)

凡例  
— Y面A  
- - - 最新活動ゾーン※  
※ 写真上は白色又は黒色で記載

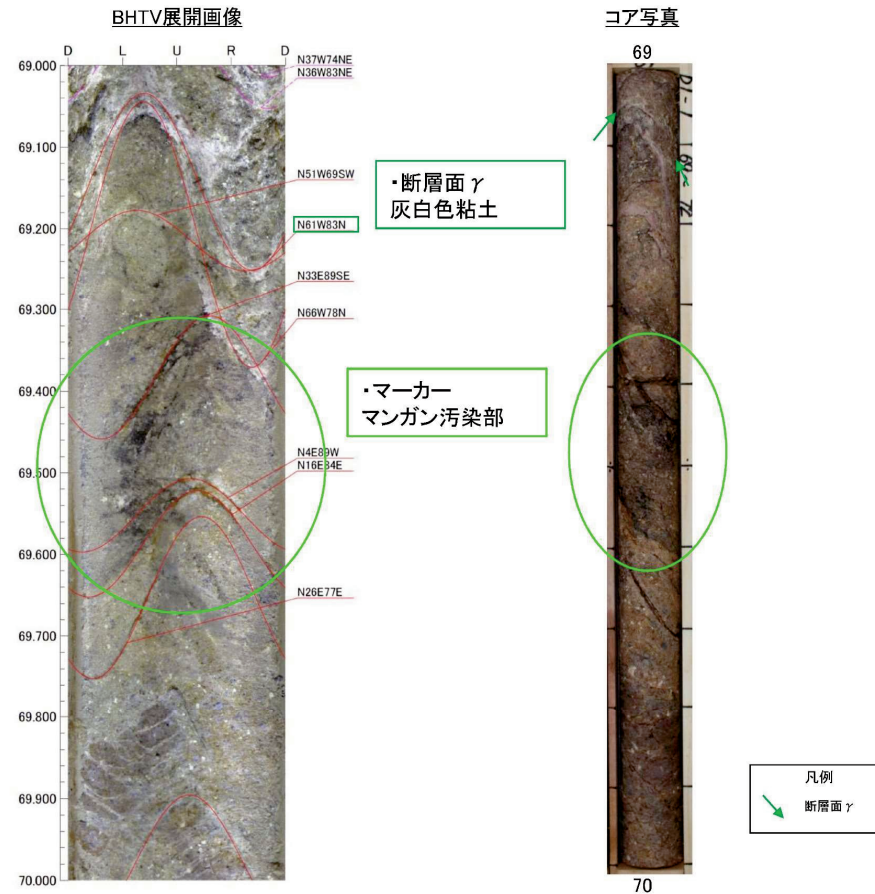
※Y面は確実に認定できる部分のみを記載しており, 割れ目や不明瞭箇所では記載していない

H24-D1-1 深度68.84~69.20m最新活動面 (No.最-13) の変更に伴い走向・傾斜 (No.最-14) を変更

- H24-D1-1 深度68.84~69.20m の破碎部において、深度69.06mの断層面 (断層面γ) に対応する走向・傾斜の計測結果に変更した。

ボアホールカメラ展開画像との対比結果 (H24-D1-1 深度68.84~69.20m)

- H24-D1-1 深度68.84~69.20mの破碎部の断層面γの走向・傾斜はN61° W83° Nである。



H24-D1-1 深度68.84~69.20m破碎帯範囲 (No.最-12) の変更に伴い, 破碎幅 (No.最-15) を変更

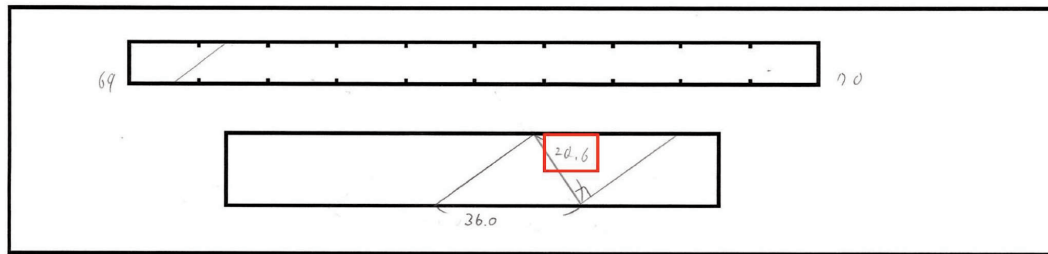
- 破碎帯範囲を深度68.84~69.20mに変更したことに伴い, 破碎幅を再計測した結果の20.6cmに変更した。

破碎幅算出資料 (H24-D1-1 深度68.84~69.20m)

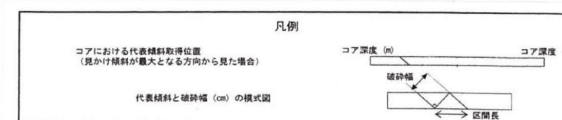
- 破碎部の区間長が長く, 破碎幅を実測できないことから, 図化した資料から算出した。
- 算出した破碎幅は20.6cmである。



凡例  
 ← → 破碎部範囲※  
 ※:写真上は白色で記載  
 代表傾斜取得位置



破碎幅算出図



H24-D1-1 深度68.84~69.20m破砕帯範囲 (No.最-12) の変更後の破砕帯範囲において、断層ガウジの特徴を有する粘土を確認 (No.最-16)

- 深度69.06mに挟在している灰赤色粘土に断層ガウジの特徴があることを確認した。

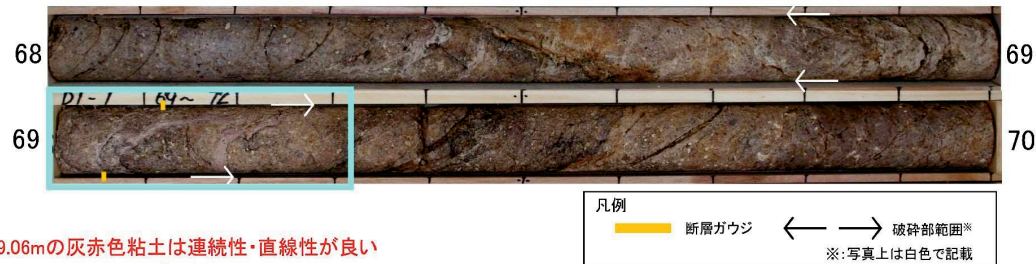
### H24-D1-1 深度68.84~69.20m ボーリングコア観察 肉眼観察による断層岩区分

- 深度69.00~69.06mは、粘土混じり岩片状を呈し、やや硬質であるが、含まれる細粒部は局所的に分布し、連続性及び直線性に乏しく、原岩組織が認められる岩片を主体とし基質も細粒化した岩片からなる組織が認められる。これらのことから変質したカタクレーサイトであると判断した。
- 深度69.06mには、灰赤色粘土を挟在している。粘土は軟質で、連続性及び直線性が良く、原岩組織が認められる岩片を主体とし基質も細粒化した岩片からなる組織が認められない。これらのことから断層ガウジであると判断した。
- 深度69.06~69.10mは、粘土混じり岩片状を呈し、やや硬質であるが、含まれる細粒部は局所的に分布し、連続性及び直線性に乏しく、原岩組織が認められる岩片を主体とし基質も細粒化した岩片からなる組織が認められる。これらのことから変質したカタクレーサイトであると判断した。
- 深度69.10mには、灰赤色粘土を挟在している。粘土は軟質であるが、湾曲し、不連続であるため、変質したカタクレーサイト中の粘土脈であると判断した。
- 深度69.10~69.18mは、粘土混じり岩片状を呈し、やや硬質であるが、含まれる細粒部は局所的に分布し、連続性及び直線性に乏しく、原岩組織が認められる岩片を主体とし基質も細粒化した岩片からなる組織が認められる。これらのことから変質したカタクレーサイトであると判断した。
- 深度69.18~69.20mには、灰赤色粘土を挟在している。粘土は軟質で、連続的であるが、直線性に乏しいため、変質したカタクレーサイト中の粘土脈であると判断した。

#### ボーリング柱状図

●68.84~69.00m: 破砕部  
 68.84~68.93m: 粘土混じり岩片状部 (Hj)  
 上端50°で不明瞭、下端55°でやや波打って連続。径5~10mmの粘土化した岩片主体。明灰褐~灰白色を呈する。幅32mm。  
 68.93~68.95m: 粘土質礫状部 (Hb)  
 上端55°、下端50°でともにやや波打って連続。径5~18mmの粘土化した岩片を多く含む。やや硬質。石英は殆んど含まない。上下端は幅1~4mmでマンガン鉱染を受け灰黄褐色化。これ以外は灰白色を呈する。幅20~30mm。  
 68.95~69.00m: 粘土混じり岩片状部 (Hj)  
 上端50°、下端45°でともにやや波打って連続。径5~10mmの粘土化した岩片主体。下端は幅2mmの硬質な淡褐色粘土脈を伴う。灰褐色を呈する。幅32~35mm。  
 69.00~69.73m: 大半の割れ目は消滅するが、69.42mに傾斜68°、69.67mに傾斜70°で直線的でシャープな割れ目が残留する。  
 69.06~69.18m: 傾斜60~80°で幅2~8mmの灰赤色粘土脈が湾曲しながら連続する。

#### コア写真



深度69.06mの灰赤色粘土は連続性・直線性が良い

深度69.10mの灰赤色粘土は不連続となる



水色砕部拡大

深度69.18~69.20mの灰赤色粘土は直線性に乏しい

